

ハイデッガーの思想における、基礎存在論からメタ存在論へ

の転換の内的必然性について*

丸山 文隆

1. 導入

1. 1 問題設定

本論文はマルティン・ハイデッガーの1928年夏学期講義「ライプニッツを端緒とする論理学の形而上学的始原諸根拠」（以下「ライプニッツ」講義と略す）にみられる「メタ存在論 (Metontologie)」の概念を解釈する。この概念が様々な興味深いものであるということは知られており、多くの研究者によって解釈がなされているが、前年に公刊された『存在と時間』の思惟とこの概念との関係についてはいまだ十分に明瞭ではない。

この概念が登場するのは、この講義中にある「補論 (Anhang)」（GA26, 196-202）である。この補論は「超越 (Transzendenz)」の問題の集中的考察の直前に置かれており、ここでハイデッガーは基礎存在論 (Fundamentalontologie) の概念をあらたに語り直している。ここで基礎存在論は、それまでの用語法（現存在の分析論）とは異なって、『存在と時間』の問いである「存在一般の意味への問い」の全体を指すもの、或いは含むものとして紹介される (GA26, 196; vgl. 轟 2007, 136)。そしてこの基礎存在論という「中心的な問題系 (Problematik) の徹底性 (Radikalität) と普遍性 (Universalität) とが、そしてそれのみが」、基礎存在論が「中心的であるものの」「決して唯一の問題ではないということ」を「洞察するように導くのだ」と語られるに至る。すなわち、基礎存在論は存在論のすべてを汲みつくすものではなく、基礎存在論とは別の問題系への「変遷」ないし「転換」が、基礎存在論の本質のうちに存している。まさにこのような「存在論の転換、すなわち存在論のメタボレー」から生じる「全体における存在者 (das Seiende im Ganzen) を主題とするような独特な問題系」こそが、「メタ存在論」と呼ばれている (GA26, 199)。

そしてこのとき「存在論が、それがそこから出発していたところへと帰還するという」この転換の「内的必然性」は、「人間の実存の原現象」において明瞭にされうると語られる。この原現象とは、『人間 (Mensch)』という存在者が存在を

了解する (verstehen) ということ、存在を了解することのうちには同時に存在と存在者との区別を遂行すること (Vollzug) が存するということ」、或いは「他の語で言えば、存在が〈了解すること〉のうちに与えられるということの可能性は、その前提として現存在の事実的な実存をもつ。そして現存在の事実的な実存が今度は、その前提として自然の事実的な眼前存在をもつということ、これである」(GA26, 199)。

この「メタ存在論」とは何であり、どのように「基礎存在論」と異なるものであり、そしてどのように必然的に「基礎存在論」からこれへの転換が洞察されるのか。これが本論文において示されるべきことである。

1. 2 先行研究の総括

上の事柄のうち、われわれはとりわけ、存在論が転換 (Umschlag) することの「内的必然性 (die innere Notwendigkeit)」(GA26, 199) を知りたく思う。「メタ存在論」が何であるのかということについてのこれまでの解釈は多数挙げられるけれども、「転換」の内的必然性がどのようなものであるかの考察にまで踏み込んだものはそれほど多いとは言えない¹。だが「メタ存在論」が存在論のメタボレー (転換) を意味する名称であること (酒井 2001, 53-5) に鑑みれば、メタ存在論が何であるかを画定することは「転換」の内実への考察を中心にして試みられるべきであると思われる。先行研究におけるこの内的必然性の説明のうち、代表的なものは次の二つであろう。すなわち、(A) メタ存在論を「領域存在論 (regionale Ontologie)」であるとするもの²、そして、(B) 『哲学の寄与』や「ヒューマニズム書簡」にあるような〈形而上学的な言葉への自己批判〉を論拠にしてこの「転換」を説明しようとするものである³。

(A) メタ存在論を「領域存在論」すなわち「基礎存在論によって達成された存在一般の認識を背景として、さまざまな存在者の領域の存在体制を主題とする『存在者論』(仲原 2008, 270) だとする解釈は、〈存在一般の理念を獲得する基礎存在論から、この理念に基づいて各種の存在者を扱うメタ存在論へ移ってゆくこと〉として、『存在と時間』の当初の進行予定についての一般的なイメージを損なわずに「転換」の内実とその必然性を説明しようという利点をもっている⁴。だがこれらは総じて、以下のような難点を解決できない。すなわち、内的必然性を洞察させる「人間の実存の原現象 (Urphänomen)」として、〈自然の事実的な眼前存在 (das faktische Vorhandensein der Natur)〉が「現存在の事実的な実存 (Existenz)」の前提 (Voraussetzung) であるということ〉が挙げられているとい

うことである。次節でみる通り、「領域存在論」を支配しているのは〈存在の了解が存在者の了解に先行する〉という前後関係であり、ここでは何らかの非現存在的存在者の存在が〈存在一般を現存在が了解すること〉に先立っているということが関心を向けられることはないはずである。〈「現存在の事実的な実存」が「自然の事実的な眼前存在」を前提する〉という記述は、何か「領域存在論」とは異なった前後関係がここで導入されていることを示唆するものなのではないか。われわれはこの点に解釈の手がかりを求めよう。

それに対し、(B) 後年のハイデッガーの立場からして何らかの欠点が基礎存在論に存していた、と論ずることは、所謂「思惟の転回」⁵の外的必然性を示すものではありえたとしても、〈基礎存在論がそれとは(何ほどか)別の存在論へと転換すること〉の内的必然性を示すものとしては不十分にとどまる。われわれは(もし(B)と同様に基礎存在論のうちに何らかの問題点を見出したいと思うのであれば)、『存在と時間』ならびにこの公刊前後の講義録から、基礎存在論の方法と課題とを明確化し、基礎存在論そのものの課題にとって、どのようにその方法が不十分であり、別の存在論を方法的に必要としていたのかを説明できなくてはならない。かくしてわれわれがここで試みるのは、「内的必然性」を基礎存在論そのもののうちにある内的必然性として説明すること、これである。

以下われわれは、1927年のテキスト内に見出すことができる内的な不調和を眼前性の問題として規定し、この問題を基礎存在論が構造的に解決しえないことから、基礎存在論を補完するための方法としてメタ存在論という別の方法が要請された、と解釈することを試みる。すなわち、存在一般の意味への問いの主導的方法として「領域存在論」が提出され、しかしこの方法で扱うことが困難である「眼前性」への注目が、領域存在論とは全く異なった方法を要請するという理路を確認する(第二節)。そして、「ライプニッツ」講義後半の、企投の原初的な成立の場面への遡行としての「超越」の分析において、「眼前のもの、自然」に接近するための、領域存在論とは異なった視点が用いられている、という解釈を提示する(第三節)。その上で、この〈企投の原初的な成立の場面への遡行〉における〈企投以前の自然を語るための視点〉がメタ存在論であると解するならば、「補論」の文言がすべて説明できることを示し、それまで提示された仮説を正当化する(第四節)⁶。

2. 眼前性問題の必然性について

本節では既になされた研究⁷をもとに、主に『存在と時間』および1927年夏学期講義「現象学の根本諸問題」（以下、「現象学」講義と略す）をとを概観することによって、「基礎存在論」の方法と課題、そして問題点を確定する。

『存在と時間』によれば、世界内存在たる現存在による存在了解は内世界的な（innerweltlich）存在者の存在を、「非主題的（unthematisch）」かつ「無差別に（undifferenziert）」、「等根源的に了解して」おり（SuZ, 324; vgl. GA24, 395f., 417）、このような「先存在論的な存在了解」を「徹底化（Radikalisierung）」することこそが存在一般の意味への問いの課題である（SuZ, 15）。同著「時間と存在」篇の課題は、現存在の存在の意味である「時間性（Zeitlichkeit）」が様々な非現存在的存在者の存在をも了解する地平、すなわち「存在時性（Temporalität）」としても機能しているという仮説を、表明的（ausdrücklich）な企投（Entwurf）によって確証することにある。「現象学」講義においてハイデッガーは、〈日常的に常に既に了解されているものを、表明的に企投し直し、把握（begreifen）する〉という方法を「学（Wissenschaft）」の方法（GA24, 399）として特徴づけ、みずから遂行している「哲学」を「存在論的な学」と呼んでいるのである。翌1927/28年冬学期講義「カントの純粹理性批判の現象学的解釈」（以下「カント」講義と略す）において「領域存在論」のプログラムが提示されるが、これは上述の〈先存在論的（日常的）了解の徹底化〉としての存在論的学が、（存在者的）諸学の根拠づけの機能においてみられたものに他ならない（GA25, 35-40）。

それではこの「存在概念」はどの程度明瞭にすべきものか。それは、「現象学」講義で紹介される次の四つの存在問題を解釈できるまでに、である。すなわち、（1.）存在論的差異の問題、（2.）存在の根本分節化の問題、（3.）存在の可能的諸変様とその統一の問題、（4.）存在の真理性格の問題（GA24, 33）。注意すべきは、「ライプニッツ」講義「補論」の直前でハイデッガーが、存在了解を問題にすることを存在問題の「徹底化」と呼び、「現象学」講義で紹介されたのと同じ四つの根本問題に取り組むことを存在問題の「普遍化（Universalisierung）」と呼んでいるということである（GA26, 188-94）。それゆえ伝統的存在論において扱われてきたこれら根本諸問題を説明するということが課題である限り、〈伝統的存在論が総じて「存在一般の意味」と見なしてきた「眼前性」が、如何なるものであるかということの説明すること〉は存在時性的分析にとって重要な部分課題となる。それではこの「存在論的学」は、どのようにして眼前性を解明しようとするのだろうか。内世界的存在者は第一次的には「手許のもの（das Zuhandene）」として出会われる（vgl. SuZ, 151）。したがって眼前性の解明という課題は、次の二つの段

階によって解決される予定であったと推測できることになる。すなわち、(1.) 「眼前のもの」が手許のものとの配慮的交渉における存在了解からの転換によって導出されることの解明と、(2.) この「手許のもの」の存在を理解することの存在時的分析とである(丸山 2012, 166-8; 丸山 2013a, 171-3)。

だが他方で「現象学」講義は、上記方法の問題点を次のように示唆している。すなわち、「眼前のものの存在、自然の存在に、[...] その存在の規定として、内世界性 (Innerweltlichkeit) は属していない」(GA24, 240) と。この注記から次のことが言える。すなわち、眼前のものの存在(眼前性)を解明するために、〈常に既に内世界的に出会われている存在者(道具)の存在を理解することの存在時的分析〉という上述の方法で接近することには、問題がある。眼前性は、手許性によって汲みつくしえない固有の内実をもっているのである。さらに、〈眼前性を、手許性からして解明する〉という「現象学」講義の基本方針の問題点は、もうひとつの側面をもっている。すなわち〈現存在の存在もまた、或る仕方では眼前性によって規定されている〉という洞察である(GA24, 217; vgl. GA26, 109; 丸山 2012, 170)。眼前性は、手許のものとの現存在との双方の根底に、固有の内実をもったものとして洞察されているのである。

3. 「ライプニッツ」講義における眼前性の問題

前節でみた眼前性の問題こそが、基礎存在論によっては解決されえず、それゆえメタ存在論という別の問題系によって補完されるべき方法的問題なのではないだろうか。以下この解釈を検討してみたい。

この解釈によれば、メタ存在論は差し当たり、〈常に既に内世界的な存在者(道具)の全体を包括している日常的存在了解を表明的に反覆する〉という基礎存在論的・領域存在論的な「学」の方法を用いるものではないと考えなくてはならない。知られている通り、『存在と時間』公刊後のハイデッガーの思惟は〈日常的存在了解を単に反覆するのではなく、この了解の原初的な成立を問題にする超越の問題系〉を集中的に考察するようになる(vgl. Görland 1981, 8)。〈企投する了解の分析から、そのような企投の出発点へと立ち戻ること〉という彼の関心の変化こそが〈メタ存在論への転換〉の意味するところであり、この転換は眼前性への適切な接近方法の必要性からして要請されたものと解釈しようということ、このことこそ、本稿が以下示そうと試みるところである。まず本節では「ライプニッツ」講義後半の超越の分析が、前節でみた領域存在論とは全く異なった仕方では眼前の

ものに接近しうるものであることを確認し（第一項）、次いでメタ存在論を、このような意味での〈企投以前の自然を語る視点〉だとする解釈を提示する（第二項）。

3. 1 世界入場

非現存在的存在者は世界の成立とともに、第一に有意義性連関のうちに位置をしめる手許のものとして出会われる。だがこの世界の成立が、これらの存在者を創造したというわけではない。非現存在的存在者の存在には、この存在の唯一の原因が現存在の力能にあるわけではない、ということが含まれている（vgl. 丸山 2013b, 152f.）。世界の成立とともに手許のものとして出会われるよりも前から、既にこれら存在者は何らかの仕方で存在していた、という仕方でわれわれは存在者の存在を了解しているのである⁸。そして人間の身体もまた、存在了解のみによって零から創造されたものではないのだから、われわれ現存在自身の存在のうちにも、〈われわれがわれわれとして存在するに先立って、何らかのかたちで既に存在していたものとしての自然〉は見出され得るのではないか。〈存在者が既に存在している〉というアプリアリと、存在了解のアプリアリというこの二つの正反対の前後関係（vgl. 丸山（近刊））をめぐる問題⁹、すなわち存在了解のアプリアリはどの程度、限界をもつものであるのかということ、存在了解の有限性が問題なのである。どの程度現存在は自由な存在者なのか。「主観の主観性」（GA26, 211）の根源としての超越への問いは、〈自然と自由との関係〉の究明である。ハイデッガーは自由の究明において、〈自然のただなかにおのれを見出す現存在が、この自然を超越している〉という事象に立ち戻ろうとする。現存在の自由の根源への問いである超越の分析は、同時に〈自由と対立するもの〉としての自然の原初的な有様に接近しうる道なのである¹⁰。

「ライブニッツ」講義によれば、現存在は存在者を超越し、世界へと「超躍（Übersprung）」（GA26, 233）する¹¹。そしてこのとき現存在は自己に、世界を「了解させるべく与える」¹²。超越は現存在がはじめておのれに世界を与え、世界を企投しつつ了解するという「世界企投（Weltentwurf）」に他ならない（GA26, 247; vgl. GA9, 165; GA24, 239; 丸山 2013a, 176-8）。このときハイデッガーがこの「世界企投」をいわば反対側から記述することを試みているということが、われわれの課題にとって重要である。

[...] 現存在は、この世界内存在の方から形而上学的に見られたならば、事実に実存するものとしては、存在者の世界入場（*Welteingang vom Seiendem*）

の、存在しつつある可能性 (die seiende Möglichkeit) 以外の何ものでもない。
(GA26, 249)

現存在は、存在するもの (存在者) であるけれども、或る観点からは同時にひとつの出来事 (生起) であるということが強調されている。「現存在」という出来事、すなわち超越という出来事は、(他の) 存在者にとってみれば、世界へと入場し、「存在者として自己を告示しうるための機会」(GA26, 249) である (vgl. GA9, 159)。かくして「存在者 (眼前のもの)」(GA26, 250) は、現存在が存在している限り、「内世界的なものになってしまっている」(GA26, 251) のである。ハイデgger はここで〈内世界的である限りの眼前のもの〉としての眼前のものにではなく、〈内世界的であることが決して必然的であるわけではないもの〉としての眼前のものに、接近する。「世界入場とその生起はただただ、眼前のものが、その固有の存在に関しては世界入場を必要としないことにおいてまさに告示される、ということの前提なのである」(S. 251)。すなわち彼は、「眼前のもの、自然」の存在を、〈日常的・先存在論的理解においてすでに「手許のもの」として出会われていた存在者〉として分析するのではなく、現存在の了解一般の根源的生起に際し、〈この生起が同時にそれである「世界入場」が、その存在にとって不必要であり、しかしこの「世界入場」によってはその存在が変化することもないようなもの〉として、この「眼前のもの、自然」へと接近しようとするのである。

超越という出来事は、自己性の根源、自己と非自己との区別の起源として注目されている。この出来事によってはじめて、存在者は自己と非自己とに、現存在と内世界的存在者とに分割されることになる。ここで、いわば〈分割以前の存在者〉を語る視点が導入されていることに注意しよう。この視点は何を支えとして成立しているのか。それは企投ではない。そうだとすれば、被投性 (Geworfenheit) がその役割を担うことになるのではないか。

3. 2 被投性による自然への接近

基礎存在論の方法である「存在論的学」の問題点、すなわち「眼前のもの、自然」の困難とは、それが〈現存在によって発見されているということ (被発見性) を、必然的な規定としてもたない〉ことにある。この困難への解決策としてハイデgger は、〈先存在論的 (日常的) 了解の徹底化〉としての存在論的学という方法の代わりに〈われわれが常に既にそこへと投げられている、自然〉にアクセスするために、被投性に基づいた存在論を必要としていた、と解釈できるのである。

われわれはメタ存在論を、このような、原初的企投によって明るみに出されるべき存在者の、あらゆる企投以前のすがたを被投性に依拠して語る試みであると解する¹³。

したがって「可能性」からして了解することである企投 (SuZ, 145) に何らか先行するものとして、現存在の「事実的な」被投性が注目されることになる。そしてまさにこの「現存在の事実的な実存」は、「自然の事実的な眼前存在」を「前提としてもつ」ような事実的な実存なのである (GA26, 199)。すなわち、われわれはここで二つの順序を考える必要があるだろう。企投に着目した順序においては、「自然の事実的な眼前存在」が「現存在の事実的な実存」に先行するという事態は理解しがたいものである。現存在が実存しつつ存在者を了解していることにおいてはじめて、他の様々な道具とあい並んで、(或いは道具的な観点から見られた自然から抽象されて)、(了解されている限りの)自然の眼前存在もまた成立する。だが、被投性に着目した順序においては、現存在によるあらゆる了解に先行して常に既に、「現存在の事実的な実存」がそこへと投げられているような、「自然の事実的な眼前存在」がたしかに成立していると彼は考えていたのではない¹⁴。

超越において超えられる以前から、或る仕方で存在していた存在者、これについて語ることが、メタ存在論であると考えてみよう。「眼前のものは、たとえそれが文字通り内世界的なものとならなくても、またそれにとって世界入場が起きるわけではなく、そのための機会がそもそもないとしても、それが存在する様式の、そしてそれであるところのものとしての、存在者なのである」(GA26, 251)。このような、いわば「神話」の如き語りをも可能にする視点が、メタ存在論であるとすればどうだろうか。

4. 解釈の正当化

この解釈の利点は、以下本節で示す通り、「ライブニッツ」講義における補論の文言をすみずみまで透明に読むことができるという点にある。これに対し、この解釈の欠点としてわれわれが認めなければならないのは、証拠として挙げられるテキストがいささか弱いように見られうるということである。だが、この証拠の弱さは競合する他の解釈に比べて弱いということの意味するものではない¹⁵。

以下補論の表現を、上述の仮説に従って解釈していこう (以下、引用はすべて GA26, 199)。「基礎存在論」の「徹底性と普遍性」「のみが」、—したがって、四つの存在問題を解決することをめがけて存在了解を問い直すことのみが、—「基礎

存在論は形而上学の概念を汲みつくすものではない」ということを「洞察するよ
うに導く」。すなわち四つの存在問題のために眼前性の問題が前面に出てくること
により、〈先存在論的存在了解の徹底化〉という方法の不十分さが明らかになる。
「存在が与えられるのは、存在者もまた既にまさしく〈現〉のうちに存在するど
うことよってのみであるのであれば、基礎存在論のうちには潜在的に」、「或
る根源的で形而上学的な変遷への傾向が存している」。「存在論が、それがそこ
から出発していたところへと帰還するという内的必然性を、ひとは人間の実存の原
現象において明瞭にすることができる」。すなわち、眼前性の問題を先存在論的存
在了解以外の通路によって扱うことの必要性から、存在了解がそこにおいてはじ
めて可能になるような場が注目されるのである。「その原現象とは、『人間』とい
う存在者が存在を了解するということ、存在を了解することのうちに同時に存在
と存在者との区別を遂行することが存するということ、存在が与えられるのは、
ただ現存在が存在を了解するときだけであるということ、これである」、或いは「他
の語で言えば、存在が了解することのうちに与えられるということの可能性は、
その前提として現存在の事実的な実存をもつ。そして現存在の事実的な実存が今
度は、その前提として自然の事実的な眼前存在をもつということ、これである」。
被投性に注目することは、存在了解という事象を「区別を遂行すること (der
Vollzug des Unterschiedes)」として捉えることへと導く。すなわち、常に既にわれ
われに与えられている (日常的) 存在了解から出発して考えるのではなく、存在
了解がまさに生起する場面を存在論的に分析することが問題となる¹⁶。存在了解
とはこのとき、或る存在者 (人間) のうちにはじめて〈存在が与えられる〉とい
う出来事である。この出来事なくしてどこにも存在は与えられない。この出来事
によって存在が存在者からはじめて区別される。基礎存在論がメタ存在論へと転
換することによって、これまで常に既に成立しているものとして語られてきた存
在論的差異が、はじめて遂行されるという出来事へと目が向けられるようになる。
このような観点において、存在了解によって特徴づけられる現存在という存在者
は、もはや人間と同内容ではない。『存在と時間』(公刊部)の議論においては、
先存在論的存在了解は人間という存在者において常に既に成立してしまっており、
それゆえ人間は常に現存在として呼びかけられえた。だがメタ存在論は、存在了
解の原初的生起を問題にするゆえ、現存在は存在了解とともに、人間において生
起するものとして捉え返されることになるのである¹⁷。かくして、存在了解の生
起を問題にするメタ存在論が、そのような生起の場として主題としなければならないのは「全体における存在者」である。なぜなら、そもそも存在了解の生起が

成立してしまっただけで、われわれは現存在と非現存在的存在者の区別をはじめとした諸々の存在者の存在の区別を了解しうるのであって、現存在が人間においてまさに生起しつつある場面に関していえば、存在了解以前の「人間」は完全に周囲の自然に埋没してしまっていて区別ができないからである。存在了解は「人間」において生起するのだが、或る意味でより正確に表現すれば、「全体における存在者」のただなかで生起するのである。「ここから、全体における存在者を主題とするような独特な問題系の必然性が生じる」。基礎存在論からこのようなメタ存在論へと転換することは、〈企投する了解の分析から、そのような企投の出発点（被投性）へと立ち戻ること〉に他ならない。したがって「この新しい問題設定は存在論それ自体の本質のうちに存し、そして存在論の転換から、すなわち存在論のメタボレーから生じる。この問題系を私はメタ存在論と呼ぶ」¹⁸。

われわれは、メタ存在論を〈「眼前のもの、自然」へと接近するために、現存在の被投性に着目する、全体における存在者の分析〉として特徴づけ、「存在一般の意味への問い」がその内的必然性により、基礎存在論からこのような分析へと変遷する理路をたどってきた。そもそもハイデggerが「存在者の諸領域」の代表的な例としてしばしば挙げるのは歴史と自然とであった（vgl. GA21, 1-12）。諸領域の存在者の存在を統一的に説明することを求める「存在一般の意味への問い」は、現存在の自己了解を基礎とし、この日常的な自己了解を徹底化する「学的な」基礎存在論として、みずからの課題を解決しようとしていたが、すでに同じ1927年に、「自然」が必然的にはこのような日常的自己了解に含まれないということが洞察されていた。このときハイデggerにとって、「自然」の本来の姿に接近することを諦めるか、「学的」方法のみによる存在論を放棄するか、どちらかを選ぶ必要があったのである。結果ハイデggerは「ライブニッツ」講義において、『学的な哲学』という表現は「根本的に矛盾している」（GA26, 231）と断言することになる¹⁹。その代わりに彼が得たのは「基礎存在論」と相並ぶ「メタ存在論」という方法である。この方法が自然の真の姿に接近するために、どれほど有効であり、どれほど不十分であったのかに関する事象的検討は、遺憾ながらここでは断念せざるをえない²⁰。

※ 本稿は、2012年6月30日に関東学院大学で行われた実存思想協会第28回大会における個人研究発表「メタ存在論を手がかりとした、ハイデggerの基礎存在論と眼前性の問題」を元に、全面的な改稿の末に成立した。発表時にコメントを下された皆様に感謝申し上げます。

また、本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

¹ 〈メタ存在論が何であるか〉の考察として特に注目すべきは細川（1992）、Bernasconi（1993）、

Crowell (2001)、古荘 (2002) である。これらはいずれも〈メタ存在論への転換の必然性〉が、〈存在論の存在者的基礎の必要性〉として『存在と時間』の導入部と最終節において示唆されていた問題系と連関していると論じており (細川 1992, 286-316; Bernasconi 1993, 33-5; 古荘 2002, 119-33)、正当かつ説得力のある議論を提示しているといえる。だが〈存在論の存在者的基礎〉とは、果たしてその名を挙げることによって転換の「内的必然性」を説明するのに十分であるほどに透明な概念であろうか。少なくともそのような問題系が『存在と時間』の問いの継続のために是非とも必要であるという理由に関しては、これら研究は十分示しているとは言えないだろう。本稿は〈存在論に存在者的基礎が必要であるとするならば、それはなぜか〉と問うものである。また「内的必然性」を詳述してはいないとは言え「メタ存在論」の簡潔にして鋭い総括を提供するものとして岡田 (2007, 89-98)、景山 (2013, 12f. Anm.) を参照せよ。

² 代表的なものとして次を参照せよ。Uscatescu (1992, 12)、Herrmann (1994a, 3f.)、Herrmann (1994b, 87f.)、酒井 (2001)、仲原 (2008)。また、内容的には McNeil (1992) もまたこれと同様の議論を含んでいる (特に p. 75)。これに対する反論として長縄 (2009) が本質的である。

³ 基本的に轟孝夫はこのような立場にあると思われる。彼は『『存在と時間』の未完の理由』を『哲学への寄与』の記述のうちに求め (轟 2007, 125)、この『『存在と時間』の『危機』への対処として『『存在と時間』後の思索の展開』を解釈し (130 頁)、メタ存在論をこのような「思索の展開」の重要な一段階として位置づけている (第三章)。

だが轟は、独特の立場にあり、注意が必要である。すなわち、彼はメタ存在論が被投的問題系であることを踏まえており、またこれが領域存在論とは異なるものであることをも強調している。だが、彼は「世界」と「全体における存在者」とをテキストに基づいた正当化なしに等置して議論を組み立てている (轟 2007, 138)。(後にみるように、「超越」の現象に注目すれば、世界は〈乗り越える先〉であり、全体における存在者は〈乗り越えられるもの〉である。すなわちこの両者はひとつの統一的事象の異なった契機として、説明の上で区別しうるもの、区別しなければならぬものであると考えられる。「ライプニッツ」講義は世界がいかなる存在者でもないことを強調している (GA26, 252)。同様に小野 (2002, 237) も 1929/30 年冬学期講義における「このような『全体における (im Ganzen)』、すなわちその全体 (seine Gänze)」が世界である、という言明 (GA29/30, 8) を基に「存在者の全体」を世界と短絡させようとしているが、論証に飛躍がある。) 従って轟はメタ存在論が被投的問題系であることを正確に捉えているにも関わらず、これを世界論の全体と短絡させることになる。こうなれば、彼にとって〈基礎存在論からメタ存在論への転換〉は、〈存在一般の意味への問いのために「世界がいかなる構造をもつか」を問うこと〉として、最早難なく説明できる事象になってしまうのである。また轟は、本稿が確認した〈存在の対象化〉を行う「存在論的学」という理念をも適切に捉えているが、この理念の後退を説明するのにもつばら後年の述懐をもとにしており、結局事象的には〈存在の対象化〉という表現は「現象学的方法に」「そぐわない」という感覚的表現でもって片付けてしまっている (轟 2007, 130)。

⁴ ハイデggerが『存在と時間』以降の諸講義録において、どのような方法、諸段階によって同著の目的である「存在一般の意味への問い」を遂行しようとしていたのかということに十分注意を払わない解釈者にとって、次の解釈は自明に近いもの感じられるかもしれない。すなわち、『存在と時間』において現存在の存在を明らかにしたハイデggerにとって、次なる課題は「存在一般」を明らかにすることであったが、「存在一般」は「全体における存在者」の存在であるから、それゆえハイデggerは「全体における存在者」を問題にするに至った、と。このような解釈は、メタ存在論を領域存在論と解する説とも相性がいいだろう。(無論、この解釈を採りながら「領域存在論」説を採用しない議論 (斎藤 2000, 136f.; 加藤 2001, 27f.)、「領域存在論」説を採りながらこの解釈を採用しない議論 (仲原 2008; 稲田 2006, 161-8) もある。) だが「全体における存在者」が直ちに〈存在一般の意味への問い〉が、その存在の意味を明らかにするべきであるところの存在者」という文脈で言及される第一次文献、若しくはそのような証拠を挙げている第二次文献は、管見の限りでは存在せず、上述の解釈は説得力をもたない。

⁵ この表現の疑わしさについては、細川 (1992, 18-22) を参照せよ。

⁶ したがって、われわれの仮説は、(A) メタ存在論を領域存在論と同一視する解釈が誤りであ

るとい主張を含み、(B)〈メタ存在論を後年の「形而上学の言葉」への自己批判から説明しようとする解釈〉を容認しうる。

⁷ すなわち丸山 (2012)、丸山 (2013a)。

⁸ このような、〈世界の「投射」に先立って存在する眼前のもの〉について、「現象学」講義は萌芽的に叙述している (丸山 2013a, 176-8)。

⁹ これは、「カント」講義における『純粹理性批判』の分析を導くものであり、ハイデッガーは特に同著の超越論的演繹との対決を通じ、これを「超越」の現象の分析において調停すべきであるという見通しに到達したと解釈できる (vgl. 丸山 2013b; GA26, 210)。

¹⁰ 「現存在は、投げられたもの、事実的なものであり、その身体性によってまったく自然のただなかにある。そしてまさに、現存在がそのただなかであり、現存在そのものがそれに属しているところのこの存在者が現存在によって超出されるということのうちに、超越が存するのである。別の言葉で言えば、現存在は、それが事実的なものとしては自然に取り巻かれ続けているにも関わらず、超越するものとしては自然を超えている。超越するもの、すなわち自由なものとして現存在は、自然にとっては何らか他なるものである」(GA26, 212)。

¹¹ 『存在と時間』第 69 節において用いられる「世界の超越」という表現は、「現象学」講義以降「現存在の超越」というより正確な表現に言い換えられることになったと考えるのが妥当であろう (GA24, 424f.)。だが田鍋 (2012) はこの二者に加え、「形而上学とは何であるか」における「全体における存在者」を「世界」と混同することにより、「現存在は [...] 世界全体を超越している」という誤った第三の表現を案出し (田鍋 2012, 163)、「三重に語られた『世界の超越』をみとめる必要があると述べ、不必要な混乱に陥っている (田鍋 2012, 167)。本稿註 3 を参照せよ。

¹² ハイデッガーはこのような「原了解 (Urverstehen)」をまた「自由 (Freiheit)」とも呼んでいるのである (GA26, 247)。

¹³ 細川 (1992, 282-6) をはじめとした多くの論者が既に指摘している通り、メタ存在論が被投性に依拠する分析であるというこの解釈には、以下のようなテキスト上の傍証を挙げることができる。すなわち、ハイデッガーは「基礎存在論とメタ存在論」の統一を、アリストテレスの『形而上学』に由来する「第一ノ哲学 (*prote philosophia*) と神学 (*theologia*) としての、哲学の二重的な概念」に対応すると語っており (GA26, 202)、これらが「実存と被投性とはからなる二重のものに対応する」としているのである (GA26, 13)。

¹⁴ 「形而上学とは何か」(1929 年) における次のような文章はこのような事情を言っているとみることができる。「結局のところ、存在者の全体そのものを捉えることと、全体における存在者のただなかにおのれを見出すこととのあいだの本質的な区別が存立している。前者は根本的に不可能である。後者は絶えずわれわれの現存在のうちで生起している」(GA9, 110)。丸山 (近刊) を参照せよ。

¹⁵ 導入で述べた通り、多くの解釈者は単にメタ存在論への転換について、その内的必然性を問うということを単に断念しており、この必然性の説明を試みている先行研究に関して言えば、それらはテキストを不自然に読み替える解釈であり、決して本稿よりも強い証明力をもつものではない。現状における資料の絶対的な不足が確実な推論を不可能にしても、直ちにあらゆる仮説の提示を差し控えるべきであるということにはならないはずである。無論、「基礎存在論」から「メタ存在論」への転換に「内的必然性」があり、しかもこの「内的必然性」が現在公刊されているテキストから読み取りうるものである、というわれわれの仮説は、ドグマとしてみなされるべきではない。だが一般的に〈内的必然性〉があるかないか〉が問題であり、このことについて客観的な知を前進させたいとわれわれが願うのであれば、われわれは一旦、〈「内的必然性」が存在し、しかもそれが公刊著作から読み取りうるものであるとするならば、それは何か〉と問わねばならない。

¹⁶ ここで存在了解はいわばあらゆる経験に先立って常に既に行われているような現象であり、この現象の分析は必然的に遡行的分析である。しかも、存在了解の遂行の「とき」は、日常的 (経験的) 時間秩序においては位置づけえないような「とき」であることには幾重にも注意が

必要である。

¹⁷ 「現存在」はこの講義中では「いまだ実存していない」ものとして語られているのである (GA26, 172)。これに対し「人間」はすでに実存していると言われる。

¹⁸ 直後に「そしてこのメタ存在論的・実存的な問いの領域においてこそ、実存の形而上学の圏域もあるのである（ここでようやく倫理学の問いが立てられる）」という文言がある。これに関し、仲原孝は「メタ存在論と領域存在論を切り離す見解は」、「メタ存在論に属する『実存の形而上学』と、領域存在論に属する『実存の領域存在論』という「この二つの『実存の学』の、どこがどう違うのかを具体的に説明できなければならない」と主張している (仲原 2008, 652f.)。答えて言わねばならない。領域存在論は現存在の日常的・先存在論的な存在了解の分節化を、表明的・学的企投によって遂行するものであり、ここにおいて現存在の存在と非現存在的存在者の存在（手許性）との分節化、さらに（理論的態度において）手許存在者が眼前存在者と見なされるような存在了解の転換とが遂行される。これに対してメタ存在論は（日常的・先存在論的な存在了解）の原初的成立と、それに先行的（ないし「同時的」(GA9, 166)）に成立している現存在の被投性の分析である。したがって、領域存在論が概念として区別しようとする現存在の存在と内世界的存在者の存在は日常的存在了解における区別を徹底化して得られるものであり、これに対してメタ存在論的に問われるのは日常的存在了解の成立以前の、全体における存在者のただなかで現存在がはじめておのれを見出す過程であり、そこにおいて自然と人間との区別や、自己自身と他の現存在との区別と共同性が成立するのだと考えられる。この二者は分析の方法として全く異なっている。

¹⁹ たしかにこの箇所は単独で見られる限り、哲学と諸学との近接性を述べているかのようにみえる。だが、前年ハイデggerが「哲学が学的であるということは、その概念のうちに含まれている」(GA24, 16)と述べていたことを思い返すならば、対照は明らかである。

²⁰ 事象的問題として、この被投性に着目した順序とは、果たしてどの程度適切に記述できるものであるのか。このことは多くの論者において、潜在的に困難として見られてきたといつてよい。すなわち、〈メタ存在論とは何であるか〉ということについてわれわれと同様の結論に至り、それゆえにこの「メタ存在論」がハイデggerの誤りであると指摘せざるをえなかった Crowell (2001) だけでなく、このような理解しがたい立場をハイデggerに帰すことをためらうがゆえに、「メタ存在論」を「存在論的存在者的基礎」の問題として受け取りえなかった論者も多いのではない。

これは「前提」とは何であるかという問題、ないし前後関係、アプリオリの問題 (GA26, 186 及び丸山 (近刊) を参照されたい) であって、この時期のハイデggerの論述のうちには、これら問題に対する或る種の迷いが読み取れる。企投と被投性との順序に関していえば、本来は「同時的」(GA9, 166) という表現が妥当であるかもしれない。

[参考文献]

第一次文献 (略号に、場合によっては巻数を添えて指示する。)

GA: Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann. 訳出に際し、ハイデgger全集 (辻村公一ほか編, 創文社) を参照した。

SuZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 18. Auflage. Max Niemeyer Verlag, 2001

第二次文献 (著者の姓と発行年とによって指示する。)

稲田知己. 2006. 『存在の問いと有限性—ハイデgger—哲学のトポロギー的究明—』, 晃洋書房。

小野真. 2002. 『ハイデgger—研究—死と言葉の思索—』, 京都大学学術出版会。

岡田紀子. 2007. 『ハイデggerと倫理学』, 知泉書館。

景山洋平. 2013. 「自然の経験と共生の創造」, 電子ジャーナル *Heidegger-Forum*, vol. 7, 1-21.

加藤恵介. 2011. 「ハイデggerにおける『自然』—『メタ存在論』をめぐって—」, 神戸山手大学『紀要』, 25-32.

斎藤慶典. 2000. 『思考の臨界—超越論的現象学の徹底—』, 勁草書房。

-
- 酒井潔. 2001. 「モノド論、基礎有論、メタ有論—もうひとつの〈ライブニッツ - ハイデッガー問題〉—」, 『思想』, 第 930 号, 47-71.
- 田鍋良臣. 2012. 「ハイデッガーの超越論—「存在の問い」の答え方—」, 実存思想論集第 27 号 『生命技術と身体』, 実存思想協会, 153-71.
- 轟孝夫. 2007. 『存在と共同—ハイデッガー哲学の構造と展開—』, 法政大学出版局.
- 長縄順. 2009. 「ハイデッガーにおけるメタ存在論と根本気分」, 『文化学年報』, 同志社大学文化学会, 第 58 輯, 251-68.
- 仲原孝. 2008. 『ハイデッガーの根本洞察—「時間と存在」の挫折と超克—』, 昭和堂.
- 古荘真敬. 2002. 『ハイデッガーの言語哲学』, 岩波書店.
- 細川亮一. 1992. 『意味・真理・場所』, 創文社.
- 丸山文隆. 2012. 「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと「存在論的な学」」, 『論集』, 東京大学人文社会系研究科哲学研究室, 30 号, 160-73.
- 2013a. 「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと超越の問題系」, 『論集』, 東京大学人文社会系研究科哲学研究室, 31 号, 169-82.
- 2013b. 「ハイデッガーの存在一般の意味への問いの仕上げとカント解釈」, 『現象学年報』, 日本現象学会, 29 号, 149-56.
- 近刊. 「無についてわれわれの語るときにわれわれの語ること—ハイデッガーのメタ存在論構想と『カント』書—」, 電子ジャーナル *Heidegger-Forum*, vol. 8 掲載予定.
- Bernasconi, Robert. 1993. “‘The Double Concept of Philosophy’ and the Place of Ethics in *Being and Time*,” *Heidegger in Question: The Art of Existing*, Humanities Press, 25-39.
- Crowell, Steven Galt. 2001. “Metaphysics, Metontology, and the End of *Being and Time*,” in *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning: Paths toward Transcendental Phenomenology*. Northwestern University Press, 222-43.
- Görland, Ingrid. 1981. *Transzendenz und Selbst: Eine Phase in Heideggers Denken*, V. Klostermann.
- Herrmann, Friedrich-Wilhelm von, 1994a. *Heideggers Philosophie der Kunst: Eine systematische Interpretation der Holzwege-Abhandlung “Der Ursprung des Kunstwerkes”, 2., überarbeitete und erweiterte Auflage*, V. Klostermann.
- 1994b. *Wege ins Ereignis: Zu Heideggers »Beiträge zur Philosophie«, V. Klostermann*.
- McNeil, William. 1992. „Metaphysics, Fundamental Ontology, Metontology 1925- 1935.“ *Heidegger Studies* 8, 63-79
- Uscatescu Barrón, Jorge. 1992. *Die Grundartikulation des Seins: Eine Untersuchung auf dem Boden der Fundamentalontologie Martin Heideggers*, Königshausen & Neumann.